

戦争体験をめぐる

日本とアメリカ

戦争体験の継承

横浜の戦争をめぐる記録は、空襲や学童疎開を中心に調査・収集され、『横浜の空襲と戦災』全六冊（横浜市、一九七五年～一九七七年）や『横浜市の学童疎開』（横浜市教育委員会、一九九六年）などに収録されている。なかでも、体験記や手記は、年数を経ても失われぬ鮮明な記憶が、その体験の鮮烈さを改めて訴えかけてくる。

一方、軍の部隊や兵士の記録は、横浜では少ないといわざるを得ない。その要因の一つは、一九四一（昭和一六）年まで横浜には連隊区司令部が置かれず、連隊の駐屯もなかったことがある。そのため、連隊史のように、横浜出身の兵士の記録を意識的に集めて紹介しようという動きも少なかった。

来年には戦後七〇年を迎えようとする現在、戦争の体験を語ることができずとも少なくない。とくに兵士としての体験を持つ方々の多くは、すでに九〇歳を超えようとしている。兵士としての戦争体験の話しをうかがうには、時機を逸しつつあるといわざるをえない。この間、体系的な調査を行ってこなかった点については、横浜の近現代史を調査研究する機関に勤める者として責任を感じる。

しかし、この間にも、兵士としての戦争体験や関連資料の提供がまったくなかったわけではない。かつて『横浜の空襲と戦災』編集時には、複数の方から軍服や軍隊手帳、記念品、写真の他、千人針や寄せ書き入りの日の丸、慰問袋などが寄贈され、横浜の空襲を記録する会を経て、「横浜の空襲と戦災関連資料」として現在当市史資料室が所蔵している。

高射砲陣地をめぐる証言

また、『横浜市史Ⅱ』編集時にも、元兵士であった方から貴重な写真や証言をご提供いただき、通史の記述に生かすことができた。野毛山の高射砲陣地構築に当たった長野出身の元砲兵少尉清水信氏は、その際の写真を手元に保存しており、横浜市に提供を申し出られた。

高射砲陣地は、市内に一五ヶ所あったとされる。個々の陣地に関する資料がほとんどない中、清水氏は、市内で最も早く高射砲陣地が構築された野毛山について、写真と共に証言を寄せて下さった。野毛山の高射砲陣地構築の経緯は、この証言によって初めて明らかになった。

清水氏によれば、一九四一年八月から、一個中隊が陣地構築と戦闘訓練に当たり、当時野毛山にあった野沢屋の社員寮を宿舎とした。清水氏自身は翌四二年初め、船舶高射砲部隊に転属し南方を転戦することになったため、そ

の後の野毛山や横浜の様子はわからないというが、野毛山は横浜の高射砲部隊の拠点となっていく。

高射砲陣地については、もう一つ貴重な証言がある。横浜市南区平楽出身で当時東大の学生だった田実博氏は、一九四三（昭和一八）

年一二月、学徒出陣で横浜の高射砲部隊（東部第四一〇一部隊）に入営した。その戦中・戦後の体験を、本にまとめて刊行している（『瑞穂陣地』NHK学園、二〇〇九年）。それによると、田実氏は野毛山高射砲陣地、さらに千葉県国府台での訓練を経て、一九四四年一月に第四一〇一部隊本部（高射砲第一一七連隊）に配属され、横浜に戻ってきた。そして翌年二月には瑞穂埠頭の高射砲部隊に転属となり、そこで敗戦を迎えている。

この間の経緯を、自身の体験と感想・印象を交えて、率直に記述している。野毛山の高射砲陣地についての描写は、清水氏から二年後の様子を示しているが、水道の配水池の周囲に高射砲が置かれ、宿舎がやはり野沢屋の寮であったことなど、一致する内容である。

また、瑞穂埠頭の高射砲陣地についてはこれまで資料がなかったが、戦時中の様子を田実氏の証言は初めて明らかにしている。完成後間もなく戦時体



野毛山の清水信氏 1941年頃 背後に見える清水信氏提供のは洋式花壇

制となり、ほとんど利用されることになかった埠頭は、枯れ草に覆われた大きな埋立地で、五〇〇メートルほど進んだ所に、兵舎と高射砲が配置されていたという。今のところ、瑞穂埠頭にあった高射砲陣地の実際を示す唯一の証言である。

そして、四月の鶴見・川崎方面の空襲を瑞穂陣地で迎え撃ったこと、五月二九日には新兵を連れての作業のため野毛山に行っていて、空襲に遭遇したことなどが生々しく語られている。

さらに興味深いのは、戦後の米軍進駐に当たっての経緯である。田実氏は、米軍への引き渡しを命じられて居残っていた。ところが、田実氏が病気の母の容態悪化でいったん部隊を離れている間の三〇日に、すでに米軍が進駐しており、瑞穂に戻った田実氏は中に入れてなかった。そして、自宅で連絡を受けて九月二日子安の高射砲陣地に集合した後、そこで瑞穂の居残り部隊も正式に解散となった。



海兵団入団 軍艦翔鶴進水記念絵葉書 1939年6月
横浜の空襲と戦災関連資料

この間に遭遇した米軍の様子や、強力な一二センチ砲（一二高）が配備されていた子安の高射砲陣地の様子も貴重な証言である。規律があつて大きなトラブルも起こさなかつた米兵の様子や、米軍のジープ・トラック・トレーラーの優秀性や大きさに圧倒されたことなど、率直に語っている。

戦艦武蔵乗組員の体験

一方、『横浜市史Ⅱ』の編集を終え、横浜市史資料室が公開施設として二〇〇八年に開室して以降、毎年横浜大空襲の五月二九日や八月一五日を迎えるに当たって、『市史通信』に関連の論稿を掲載したり、関連展示を行ってきた。その度に様々な反響があり、少数ながらも自身が兵士として戦争に参加

された方の情報提供もいただいた。

なかでも、戦艦武蔵の生き残りの一人佐藤健輔氏の体験はたいへん貴重なものであった。佐藤氏は残念ながら二〇一年暮八八歳でお亡くなりになつたが、当時戦艦ミズーリ保存協会史実調査委員会の日本側委員として、日本での調査に当たっており、当横浜市史資料室にもその調査の一環で来室された。その後、佐藤氏の調査に協力する一方、佐藤氏からも様々な資料をご提供いただいた。そのなかに、『ハワイ報知』（一九八七年一月一日）に掲載された佐藤氏のインタビュー記事がある。以下、主にこの記事をもとに佐藤氏の経歴と体験を紹介する。

佐藤健輔氏は一九二三（大正一二）年に横浜で生まれ、本町小学校を卒業、一九四二（昭和一七）年五月に横須賀海兵団に入団、海軍砲術学校で訓練を受けた後、一九四三年五月に対空機銃の射手として戦艦武蔵に乗り組むことになった。一九四四年一〇月、レイテ沖海戦に参加して、シブヤン海で艦と共に海に沈んだが、浮遊物につかまつて助かった。

乗組員約二四〇〇人の内一四〇〇人が救助されたが、その多くは帰国できずにフィリピン守備隊として残され、多数の戦死者を出したという。また、一部は帰国を許されたが、帰国途上の輸送船サントス丸は米潜水艦によって撃沈され、三〇〇人ほどが犠牲になった。佐藤氏が乗り込んだ空母隼鷹も潜

水艦の攻撃を受けて、魚雷二本が命中したが沈没をまぬがれ、かろうじて佐世保に入港した。

結局、戦艦武蔵の生存者の多くが戦までに亡くなつており、佐藤氏は戦後まで生き残つた限られた生存者の一人ということになる。これは、当時の

軍が戦艦武蔵の撃沈を隠すために、生存者を隔離しようとした結果であつた。一九四四年末になんとか帰国した佐藤氏は横須賀海兵団に戻り、逗子小坪砲台に配属され、終戦までそこにいた。披露山にあつたという小坪砲台跡は、現在披露山公園となつている。終戦を迎えた小坪砲台の将兵一〇八人の名簿が残されている。その写しを佐藤氏から提供していただいたが、その名簿のなかに横浜市磯子の加藤増吉という名がある。美空ひばりの実父である。

戦艦武蔵の生き残りとして過酷な運命を歩んだためか、戦後、佐藤氏はかつての敵であるアメリカの元軍人たちと、敵味方を超えた交流を重ねた。そして、戦艦ミズーリ保存協会史実調査委員会設立に、日本側の一員として参加するに至つたのである。

黒潮部隊の現実

この佐藤氏から、通称「黒潮部隊」に所属していた方を紹介していただいた。この部隊は海軍の特設監視艇隊で、正式には第二二戦隊といい、横浜に本部があつた。特設監視艇隊は、艦艇が不足する状況のなか、遠洋漁船を徴発

して改装し、敵の飛行機と艦船を監視する任務を負つていた。元々は漁船であつたため、武器も装甲も貧弱で、敵を発見して通報するかしないかの間に、見つけた敵の攻撃を受けて乗員が負傷・死亡したり、撃沈されることも少なくあつた。

この黒潮部隊に一九四五年五月に配属された宮腰順一朗氏は、一九四三年五月に志願兵として横須賀海兵団に入団、戦艦武蔵の機銃手を経て内地勤務に移つた。武蔵沈没時に乗艦していたかどうかは不明である。黒潮部隊に配属されて間もなく、五月二九日の横浜大空襲に遭遇する。山下公園前の香港上海銀行の屋上から、空襲の様子を眺めていたという。

また、戦争末期の黒潮部隊の様子については、年配の応召兵が多く、大棧橋などにムシロを広げて海水をくみ上げて塩を作つたり、山下公園で炭を焼いたり、空地でサツマイモを栽培したりと、およそ戦争とはかけ離れた様子であつたと証言している。その一方で、出撃した黒潮部隊の艦艇や乗員は大きな犠牲を出し、四月・五月だけで沈没二九隻を数えている。

黒潮部隊の他に、横浜に拠点を置いた部隊に横浜港湾警備隊がある。本部を横浜生糸検査所に置き、橋隊・桜隊に編成され、それぞれ山手女学院・横浜共立学園を宿舎としていた。横浜港の警備の他、徴用商船を使って兵員輸送にも当たり、とくに南方への兵員輸

送の際に大きな犠牲を出したようだ。

このように、横浜には駐屯する連隊がなかった代わりに、憲兵隊、陸軍警備隊と高射砲部隊が配置され、また黒潮部隊や横浜港湾警備隊など海軍部隊が配置されると共に、山下公園一帯や港湾施設に多くの海軍施設があった。

海軍軍需部をめぐる証言

海軍施設の内、軍需部に関する証言を今年に入ってお二人からうかがうことができた。そのお一人は、今年一〇〇歳を迎えた元海軍兵士である。現さいたま市北区吉野町出身の深井三一（みつかず）氏は、一九二四（大正三）

年一月生まれ。一九四二（昭和一七）年頃から、子安の日産に勤めていたが、一九四四年に招集され、横須賀の海兵团に入団した。南方へ派遣されるはず

だったが、船もなくなくなっていたため内地勤務の新たな部隊が編成されて、運転手として物資の調達に当たっていた。

戸塚に宿舍があり、一九四五年五月二九日には物資の調達に向かう途中横浜大空襲に遭遇した。山下公園にさしかかった所で空襲警報が鳴り、トラックを止めて山下公園の中の防空壕に飛び込んだ。初めて空襲に遭遇したので、好奇心でのごこうとしたが、上官に止められ、夕方まで防空壕にこもっていた。それから宿舍に戻ろうとしたが、道路にはがれきが散乱し、死体もあり、電線が垂れ下がっていて、トラックが通れる道を探りながら戻ったという。

深井氏の所属した部隊は、長野県での飛行場建設の任務を与えられていた。

本土決戦に備えて、迎撃機や特攻機を配備した秘匿飛行場を各地に作るうとしていたのである。深井氏らは横浜大空襲の直後、六月に長野県の岩村田（現佐久市）に移り、元長野県種馬所牧草地で飛行場の造成作業を行った。

八月一日には、物資の調達のためか、横須賀の軍需部にトラックで向かった。その途中、未明に空襲を受けた熊谷を通過して焼け跡を目撃した。この日、横須賀で玉音放送を聞いたが、部隊は直ぐに解散しないというので、米五俵を受け取り長野に戻った。その後、一〇月まで長野に留まり、米軍の進駐を待つて解散し、帰郷した。

横浜の海軍軍需部施設

海軍軍需部の施設は、横浜にもあった。物資貯蔵のための倉庫も、各所にあったようだ。その横浜の海軍軍需部の施設に勤めていた松本一雄氏が、今年の春『神奈川新聞』にその体験を投稿した（四月二二日）。新港埠頭の一面にあった軍需部の施設に勤めていたというのである。その後、直接ご本人からお話しを聞く機会を得て、「戦い・敗れ・そして我が人生」と題してご自身の体験をまとめられていることを知った。以下は、その記述による。

松本氏は一九三〇（昭和五）年横浜市南区南太田の生まれ、海軍航空隊の子科練に憧れて受験したが失敗し、一



海軍航空隊の友を囲んで 1943年8月 横浜の空襲と戦災関連資料

五歳で軍属として海軍軍需部に勤めることになった。一九四五年四月頃、新港埠頭の軍需部施設に配属され、下士官室当番として下士官たちの身の回りの世話をし、一方軍事教練なども受けたという。物資の引き渡しにも立ち会い、各所の保管場所にも行った。その中でも根岸競馬場には、「牛缶・クジラの缶詰などの高級品が沢山保管してあった」という。先の深井氏も、当時の海軍軍需部には米をはじめとした食料品が豊富にあったと証言している。

当初は自宅から通っていて、五月二九日はたまたま風邪で休みを取り、自宅で空襲に遭遇した。家族は近くの清水ヶ丘の墓地に逃げて助かったが、自宅は全焼した。そのため、家族は近所の避難場所へ仮住まい、自身は新港埠

頭の軍需部で寝泊まりすることになった。八月一日そこで玉音放送を聞くが、軍需部の兵隊たちは敗戦を信じず、軍用車に乗り込んで「負けていない、負けていない、これからだ、本土決戦だ。」と街中を触れ回ったという。

しかし、敗戦の事実は変わらず、残務整理に当たり、乾燥餅など多少残っていた食料品の分配を受けた。そして、米軍進駐の日、万国橋に米兵と日本の警官が並ぶ中を引き上げたのである。

この松本氏の証言は、新港埠頭に軍需部の施設があったことを明らかにしている。横浜港の各所や山下町・山下公園に様々な海軍施設があったことは知られていたが、それぞれの正確な位置や組織・施設の名称などはよくわかっていない。また、根岸競馬場の観覧席下に、戦時中海軍の印刷所があったが、物資の貯蔵所があった事実は松本氏の証言によって明らかとなった。いづれも、これまで知られていなかった事実に関する貴重な証言といえる。

以上のように、空襲や戦争の実際は体験した当事者の証言によらなければ伝わらない点が多々ある。その上、軍関係の資料は限られており、部隊や施設に関する情報もこうした証言によって得られることが多い。

元B 29搭乗員をめぐる証言

戦争の当事者という点で大変興味深い資料が、昨年寄贈された。前号の『市史通信』でも紹介した、元B 29搭乗員



第504爆撃群のB29搭乗員たち テニアン島 1945年6月7日 山本博士資料

「地獄だと思えます。」と語った。同席していた夫人も、「彼は農場で育った、普通の市民でした。」と、当時二一歳の純朴な若者だった夫を思いやる言葉をかけている。ヤングクラス氏は、一七回目の出撃で撃墜され、命を失いかけた。当時、B 29の搭乗員は、三五回（三〇回）のときもあつた）の出撃を終えると除隊され、本国帰還が許された。ヤングクラス氏はそのちようど折り返し点で墜落したわけだが、中には初出撃で墜落し死亡している例もある。

「一人全員が戦後無事に帰国を果たした幸運な例であつた。同氏の来日の目的には、保護された地元の人々との交流と共に、処刑された戦友の慰霊碑を訪問することが含まれていた。そんなヤングクラス氏も、実際に自分が行つた爆撃を受けた小野静枝氏の前に、感情を抑えることができなかつたのだろう。そのヤングクラス氏に対して小野静枝氏は、「こうしてお会いできたことを嬉しく思います。」「ブルースさんも、数か月の間に一七回も出撃されている。一つ間違えば命はなかつたわけで、戦争とは、勝つても負けても残酷で空しく、長く心の底に傷を残すものであるということを、改めて思いました。」と、やさしく語りかけて対面を終えている。

B 29搭乗員の処刑や虐待に対しては、戦後B C級裁判で厳しく裁かれた。一

【参考文献】
 『横浜市史Ⅱ』第一巻下、横浜市、一九九六年
 『佐久市志 歴史編(四) 近代』佐久市、一九九六年、マッシュナル『B-29日本爆撃30回の実録』ネコ・パブリッシング、二〇〇一年、バーン『63年目の攻撃目標』元B 29搭乗員飛行記録 創風社出版、二〇〇八年、日笠俊男『B-29墜落 甲浦村1945年6月29日』吉備人出版、二〇〇〇年、草間秀三郎『B 29墜落 米兵を救った日本人 増補版』論創社、二〇〇三年、草間秀三郎『増訂 日米相互イメージの変遷 B 29墜落機をめぐる』南窓社、二〇〇八年、横浜弁護士会『法廷の星条旗 B C級戦犯横浜裁判の記録』日本評論社、二〇〇四年

【付記】
 空襲や戦争を体験された方の証言を集めています。また、当時の手紙・葉書・日記や写真などの資料も探しています。ご協力いただける方は、ぜひ横浜市史料室までご一報ください。連絡先は、〇四五―二五一―三二六〇です。

(羽田博昭)

マーティン氏の資料である。
 この資料に関連して、昨年来様々な調査を行ってきたが、マーティン氏と同じ第五〇四爆撃群に所属し、横浜空襲の際に撃墜された搭乗員の一人ブルース・ヤングクラス氏が、一九九六(平成八)年に来日していたことがわかつた。その際、横浜にも立ち寄り、彼らの部隊が目標とした東神奈川駅で空襲に遭遇した小野静枝氏と対面していたのである。

路のコースとして設定されていた房総半島に向かい、千葉県大多喜町に墜落した。搭乗員全員が、パラシュートで脱出した。山中に落下したヤングクラス氏は、一人徒歩で人里に向かい、地元農民に出会って保護された。そして、警官に拘束されて、大船の捕虜収容所に入れられた。

脱出から保護に至る経緯を淡々と語つた後、質問者から女性や子どもなど空襲被害者の悲惨な状況について感想を求められると、ヤングクラス氏は急に嗚咽し、「爆撃をすれば、…当然犠牲者が出るわけで、そういう意味で、それが戦争というものだと思つております。地獄だと思えます。」と語った。同席していた夫人も、「彼は農場で育つた、普通の市民でした。」と、当時二一歳の純朴な若者だった夫を思いやる言葉をかけている。ヤングクラス氏は、一七回目の出撃で撃墜され、命を失いかけた。当時、B 29の搭乗員は、三五回（三〇回）のときもあつた）の出撃を終えると除隊され、本国帰還が許された。ヤングクラス氏はそのちようど折り返し点で墜落したわけだが、中には初出撃で墜落し死亡している例もある。

戦争の現実の両面

確かに、撃墜されたB 29の数は限られている。しかし、日本爆撃の際に三〇〇機以上が墜落しているのも事実であり、しかも脱出して保護、ないしは捕らえられたB 29搭乗員には厳しい現実が待っていた。当時の日本では、B 29の搭乗員は捕虜ではなく、無差別爆撃を行つた戦争犯罪人であるという扱いを受けることが多かつた。そのため、裁判もなく処刑されたり、虐待されることもあつた。

ヤングクラス氏の場合は、クルー一人全員が戦後無事に帰国を果たした幸運な例であつた。同氏の来日の目的には、保護された地元の人々との交流と共に、処刑された戦友の慰霊碑を訪問することが含まれていた。

方、B 29による空襲で亡くなり、また未だに癒えぬ傷を負つた一般市民も大勢いた。B 29搭乗員の資料は、こうした戦争の現実の両面を知る上で、象徴的な資料であつた。

戦争体験者の証言は、歴史資料として事実関係を確定するためには関連資料との照合が不可欠である。しかし、今回紹介した証言は、それ以上に戦争の現実の様々な側面を明らかにしている点に意義がある。戦争の過酷な体験を経て、敗者と勝者、そして日本とアメリカという国を超えて生まれた交流の中に、歴史の教訓として学ぶべき戦争の現実が示されているといえよう。